「別府の子どもたちの未来を語るシンポジウム～ICT がつなぐ学校と社会の未来～」
シンポジウム記録

【 日　時 】　令和 5 年 11 月 10 日（金） 15 時～17 時
【 会　場 】　別府市役所 1 階レセプションホール、オンライン視聴（ハイブリッド開催）
【出演者】
≪パネリスト≫
立山　博邦　（立命館アジア太平洋大学　准教授）
鳥居　健介　（教育アクティビスト（元公文教育研究会・社長室勤務））
中村　恭子　（BEPPU PROJECT 代表理事）
松岡　烈　　（別府中央小学校　教諭）
土井　敏裕　（株式会社 Doit　代表取締役）
≪コーディネーター≫
稲尾　隆　　（別府市教育部教育次長）

〇急激に発展する情報化社会の中で、どのような子どもが育ってほしいか。
（松岡）子どもたちに取捨選択できる力を持ってほしい。情報過多の現代に合わせ、正しいことは正しい、間違っていることは間違っていると判断できる子どもになってほしい。

（土井）学びを楽しめる子に育ってほしい。子どもたちが楽しく学べる世界を作ったら、もっと社会がよくなると思っている。
　もう一つは自ら学べる、自分が学びたいことを自分で学んでいける世の中が必要。そのために ICT が必要。

（立山）自立的な学習者を育てたい。自分で情報を選んで、自分で判断して、自分で行動をしていく、そんな人間になってほしい。
　2 つのレベルで情報を区別する力を身に付けてほしい。1 つは何が正しくて何が間違っているのか、情報の真偽を見分ける力。もう一つは、何が自分の目的に必要な情報なのかを区別する力。自立した学習者になるためには、この 2 つの力が必要。
　探究学習の成果が大学でも感じ取れるようになっている。

（鳥居）子どもはもちろん、大人はどうあればいいのか。大人たちにとっては当たり前のことが、何故、未来の子どもたちが、未来を生きる準備をする場所でそうなっていないのか。大人が、悪気なく子どもたちに押し付けていることもあるのではないか。我々の普通を子どもたちに当てはめたらいいのではないか。

（中村）親としては、どんな社会であれ、思いやりがあって、人をリスペクトできて、リスペクトされる、そんな社会で生きていってほしい。自分の力で考えて、自分で行動できる子に育ってほしい。本人にとって幸せに生きていってほしい。その手法として ICT などいろんな手法がある。子どもたちにとって、こうじゃなきゃいけないが強すぎるのではないか。失敗が許される社会であってほしいと強く思う。
　また、想像力を養ってほしい。ちょっとした行動が、誰を傷つけどのように返ってくるか、想

像力を豊かにしながらICTをうまく活用していければいい。

（土井）大人の課題の方が多い。情報に関しては、圧倒的に子どもの力量が大人を上回っている。親世代がスマホと正しく付き合えているのか。子どもたちの情報化社会と大人がどこまで歩み寄っていけるのかが、学校や社会に求められている。前向きに使えるやり方はないか。負の側面ばかりだと、せっかく学校に入ったICTが生かされなくなってしまう。

〇タブレットの持ち帰りについて

（松岡）そもそも持ち帰ることが目的になってはいけない。持ち帰る目的を明確にしていないから、持って帰らなくてもいいと考えているのではないか。リスクを恐れすぎているのも大きい。ネットトラブルの恐れを避けている。子どもとの連絡手段としてはすごく役に立つ。

（中村）タブレット自体がはさみと一緒で道具。あれば便利だけど、使い方を間違ったら誰かを傷つけたりする。ただ、タブレットには中毒性があったり、暴力にさらされることがあったり、物を買ったり課金したりするのが親としては心配。持ち帰らなくても起こることはあるから、一概に持ち帰りがダメというよりも、使い方やマナーや判断ができる必要はある。自分を律することが必要。家庭や時代によっても変わるので、話し合いを続けることは大切。

（土井）全国的には、長期休みが一つのターニングポイント。完全に持ち帰る自治体もある。しない理由は、「破損の不安」「通信環境がない家庭」「セキュリティの確保」「生徒指導事案の発生」、つまり大人に不安がある。

持ち帰る目的はドリルが多い。それは、子どもにとっては楽しい理由にならない。創作活動で、創りたいものの延長線上に持ち帰りがあるような課題を出せばいい。ただ、そもそも授業がそのようなつくりになっていない。授業をどうするかという課題がまず先にある。

（松岡）創作活動に関しては、運動会の表現を全て子どもたちに任せた。その時に大活躍をしたのがタブレット。持ち帰って自分たちで練習したいと言ったり、見本を撮って家で練習したり、動画を見てよりよくするための話し合いをしたりしたので、創作の芽がちょっとだけできた。

（立山）子どもたちによると、毎日授業で使っているが、先生によるという。持ち帰りは長期休暇のみと言う。なぜかと聞くと、「自分たちが信用されていないから」「持ち帰る理由がない」と言う。課題はプリントなので、授業のデザインから変えないと、ただ単に持ち帰らせても深い学びにはならない。子どもたちは自分の端末を持っていて、創作活動も日頃からやっているし、分からないことを検索している。学校ばかりにICT教育を期待しないで、家庭でできることもたくさんあると思う。家庭でもいろんな教育的指導ができるのではないか。

（鳥居）やはり怖い面はある。だから、無制限にというのは難しい。ただ、大人には使っていい、使ってはいけない時間帯というのはあまりないし、必要な時には使う。怖い面もある一方でこんなことができたら楽しいという面もある。そういうことにもっと妄想力を発揮するというのも大人の役目だと思う。あまり使っていない生徒も、本当は使えるようになりたいと思っている。何かができないと「できていない」ということではない。できるできないの間には、できる

ようになりたい人もいる。できることからやってみて、「やってます」と言えばいい。

〇デジタルシティズンシップの育成について

（土井）そもそも「ICTの利活用」と「情報モラル」は相反する。その間をうまく取り持っているのがデジタルシティズンシップの考え方。「善き使い手、社会の担い手になることを目指す」という事がデジタルシティズンシップの一番根幹の考え方。情報モラル教育は考え方と態度を育成するという考え方。デジタルシティズンシップ教育は、能力やスキルをつけていく教育。自分で考えてみよう、トラブルをどう対処するかなどをみんなで考えてみようというもの。何かが起きた時に、そのスキルを持っているかどうかが、トラブルを回避する分かれ目になる。そんなスキルを獲得させる学習者中心の教育がデジタルシティズンシップ教育と言われている。

（立山）ICT の利活用を促進すると同時にデジタルシティズンシップを両輪で促進させるというのが必要。情報に限って言うと「正しい」は、客観的に事実かという事に尽きる。何かを議論する上で根拠を持っているかが大切。デジタルシティズンシップ教育において、情報って何なのか、その情報はどれだけ客観的に事実と言えるのか、誰がその情報を生み出しているのかということを含めて教育をなされるべきだと思う。

（中村）このシンポジウムに出ることになって初めて知った言葉。ある中学生が、「インターネット上にある情報を正しいなんて思っていない」と言っていた。情報はあちこちに転がっていて、それをうまく活用すればいいということは、実は子どもの方が分かっている。デジタルシティズンシップのような考え方も、大人が決めるのではなくて、みんなで話して作っていけばいい。

（立山）図書館・オンライン等に関わらず、情報を批判的に読む事が大事。どういうタイプの情報であれ、批判的にきちんと論理立てられた情報なのかという視点は今の子どもたちに必要。

〇生成AIについて

（鳥居）生成AI の使い方は様々だけど、全部任せる訳にはいかない。最終的には自分で判断する。怖がる前にやってみることが大事だと思う。やっぱり怖いから子どもたちを守ってあげようとするのは善意だと思うが、守りきれるわけないというのも一方にある。最終的には子どもたちが自分で自分を守る手伝いをしていくことが大事だと思う。

（中村）使えるものは何でも使うので、アートの世界ではかなり使われている。AI は当たり前にあって、逃れられないものになっている。これは学校だけではなく、社会や家庭にも今から問われてくる。答えを出すことは、ほぼ AI がやってくれる。だから、問いを立てることが人間に求められると思う。1＋1＝2と言えるよりも、「本当に1＋1＝2なの？」という問いが大切になる。それは、アートは得意なので、AI ができたことによってますます面白くなっていくと思う。

（松岡）文章を書くのが苦手な子どもが、Chat GPT が出した文章を「自分が書きたいのはそれに似てるな」と感じて書く、ということを繰り返すことで、自分の書き方が分かってくるということもある。だから、子どもと一緒に我々も使ってみて、これならうまくいきそうだなというの

を試しながら使っていけばいいと思う。

〇参観者から

（保護者1）我が家では Chat GPT を一緒にやることで、家族の会話の時間になっている。怖さももちろんあるのでそれも伝えている。

また、ICT は道具だから、スキルは学校でという事になる。だけど、学校に求められるものは、人間力や生きる力などである。根拠を持って話す力をもう一度高めないといけない。学校で必要なのはそのことだと思う。それを学校だけじゃなく家でも地域でも行う必要がある。

また、間違ってもいい、戻って来れるという環境を作ることも大切。

ICT を使うことと同時に、自分たちの社会や未来を大人がどう語れるのかということを親も考えないといけない。

（保護者2）「学校に期待していない」という言葉は、私もそうだなあと思った。保護者として、タブレット活用の力を学校に求めていないと私個人は思っている。ICT だからどうだということは無くて、人を思いやったりとか、そういうことが先だと思う。

（ICT 支援員）ICT の授業をしていると子どもたちが勝手なことをやりだす。でも、「こんなことやっちゃダメじゃん」と気がつく子が出てきて次第に収束していく。先生たちが学級づくりをしていることが、うまくつながっているんだなあと思う。子どもたちは、ICT の中で自分の考えを思考ツールなどをうまく使ってとらえている。何かをすれば、それが考える姿勢を変えたり、立ち位置を変えたりしたものの見方ができるようになる。デジタルは、いろんな考えを補うツールであるなと現場に立ってすごく思う。

（教職員）学校現場で「正論は正義である」ということは正しいのか。発表会でみんなで歌う時、「歌わない」というのも一つの選択だし、それでも歌わせるべきなのか、迷いながら対応している。学校現場で正論というのは正義なのかがわからなくなっている。

（土井）多分、今の子どもたちって雑なのはダメ。だから先生が対話することで乗り越えていくしかないのかなと思う。「こうするのがいいんだぞ」と投げかけた時に、そのバックボーンに何のためにそうするのがよいのかということをちゃんと整理して話していくことが大切。

（鳥居）正論は正義かと言われると、違うと思う。誰の正論かという問いが出てくる。それぞれの考えを認めた上で、じゃあみんなでどうするか、何のためにそれをするのか、みんなが同意できるところは何なのか、ということをみんなで考えたらいい。

別府の子どもたちの未来を語るシンポジウム

別府の子どもたちの未来を語る
ICTでつなぐ学校と社会の未